

児童思春期専門外来（Child adolescent outpatient）を受診されているご家族様、診察の待ち時間や日常の隙間時間にお気軽にお読みください。

特別企画

ジブリで学ぶ子どもの心



皆さんの中で、ジブリの映画を見たことがないという方は殆どいらっしゃるのではないのでしょうか。自分自身が子どもの時、親になって子どもと一緒に、もう何度見たか分からないという方も少なくないでしょう。コロナの巣ごもり生活で改めて見返したという方もいらっしゃるかもしれません。

そしてどの作品にも、喜びや感動だけではない様々なメッセージが含まれており、それは＜子どもたちの心の成長＞を考える上でも多くの示唆を与えてくれているように思います。

Chao通信では「特別企画：ジブリで学ぶ子どもの心」と題し、臨床心理士/公認心理師の岩倉拓先生と一緒にいくつかのジブリ作品を通じて子どもたちの心の成長について考えていきたいと思います。第一弾は「となりのトトロ」です。読み終えたあと、改めてトトロを見たくなるかもしれません。



ジブリで学ぶ子どもの心① <となりのトトロ> ーなぜサツキとメイにトトロが見えるのか？ー

この連載では、臨床心理学の視点や理論をもとに、スタジオジブリの映画の「謎」や「問い」に迫ってみたいと思います。これが正しい解釈で謎の答えです、という訳ではありません。あくまでも臨床心理士の視点ではこう見えるということを丁寧にみていくつもりです。お読みいただいた後でジブリ作品を見る機会があれば、新たな見方ができたり、作品をもっと味わうことができたりすることを目指して書いてみようと思います。



わたしは「となりのトトロ」を見ている子どもを横で見ているのが好きです。映画の世界に入り込み、口は半開き、指をくわえ、表情が動いています。トトロや猫バスのシーンでは、まるで自分が乗ったり触ったりしているかのような表情をしています。「サツキ」と「メイ」の姉妹の気持ちの変化にシンクロして、ホッとしたり、不安になったりしているのを感じます。それを見ていると、子どもたちをこんなにひきつけるこの映画の凄さを実感します。大人でも（邪念や雑念を払う必要があるかもしれませんが）トトロをじっくりと見ると思わず引き込まれてしまうはずです。「となりのトトロ」はわたしたちの心の何か重要なものに触れているのです。



さて、最初の謎に迫ってみましょう。なぜサツキとメイにはトトロが見えるのでしょうか。「子どもの時にだけあなたに訪れる不思議な出会い」と歌われているように、純粋な子どものころだから見えるというのが一つの答えでしょうか。しかし、よく見てみると子どもだからトトロが見えているというわけではありません。たとえば、隣の家のカンタにも見えていません。それどころか、姉妹にも見えていないシーンも見られます。たとえば、引っ越しの夕方、サツキが薪を集めているシーンで風が巻き起こりますが、その時にトトロか猫バスが通っているのですが、サツキには見えていないのです。

どうやらトトロに会うためには、子どもであるだけではなく、なんらかの条件が必要なようです。

はじめにトトロに会ったのは妹のメイでした。

ここでは、謎解きのため、トトロに会うまでのメイのころの動きを丁寧に見ていくことにしましょう。

引っ越しの日に姿を見せないお母さんは、病気で病院に入院していることがわかります。トトロに会う前日、父親とサツキとメイの3人はお母さんのお見舞いに行きます。母はとてもやさしく、「おばけ」が住んでいる転居した家のことも「楽しみ」と言って子どもたちを励まします。ちなみに後に紹介する予定の「千と千尋の神隠し」の千尋の両親と「となりのトトロ」の両親はタイプが全く違うことも注目してください。

トトロの両親は、子どもたちの心を気遣い、想像力や冒険を促進するサポートティブで理想的なよい親として描かれています。引っ越しで忙しい時に屋根裏で遊んでいても叱ることない「神対応」が随所に見られます（ややお父さんが頼りないという意見もありますが、それも含めて理想的なのではないでしょうか）。



それにひきかえ、千尋の両親は子どものころへの思いやりに欠け、自分の欲望を追求する「塩対応」の親と言えます。もちろん、千尋の両親の方がよりリアルで、現実近く、トトロの両親がレアなのでは…と私は感じるのですが。ともかくこの両親の「神対応」と「塩対応」、このことは「サツキとメイ」と「千尋」が体験する世界が大きく異なっていくことと関係しているのですが、その謎については追いついて追いついて明らかにしていくことにしましょう。



お見舞いに話を戻しましょう。やさしく、愛に満ちたお母さんとの再会の帰り道「お母さん元気そうだったね」と話し合いながら、メイは注目すべき発言をしています。

メイ 「お母さん、メイのお布団で一緒に寝たいって」

サツキ 「あれ？メイは大きくなったから1人で寝るんじゃないの？」

メイ 「お母さんはいいの」



メイは引っ越しの日も「怖くないもん」と強がっていますから、かなり負けん気の強い女の子なのでしょう。怖い時ほど怖くない、と言うのだとしたら、本当は布団でお母さんと一緒に寝たいのはメイ自身ということになります（このころの動きは「防衛機制」と言い、叶えられない辛い気持ちを反対の気持ちにしたり、自分ではない人の思いにして、その辛さを紛らわすのです）。

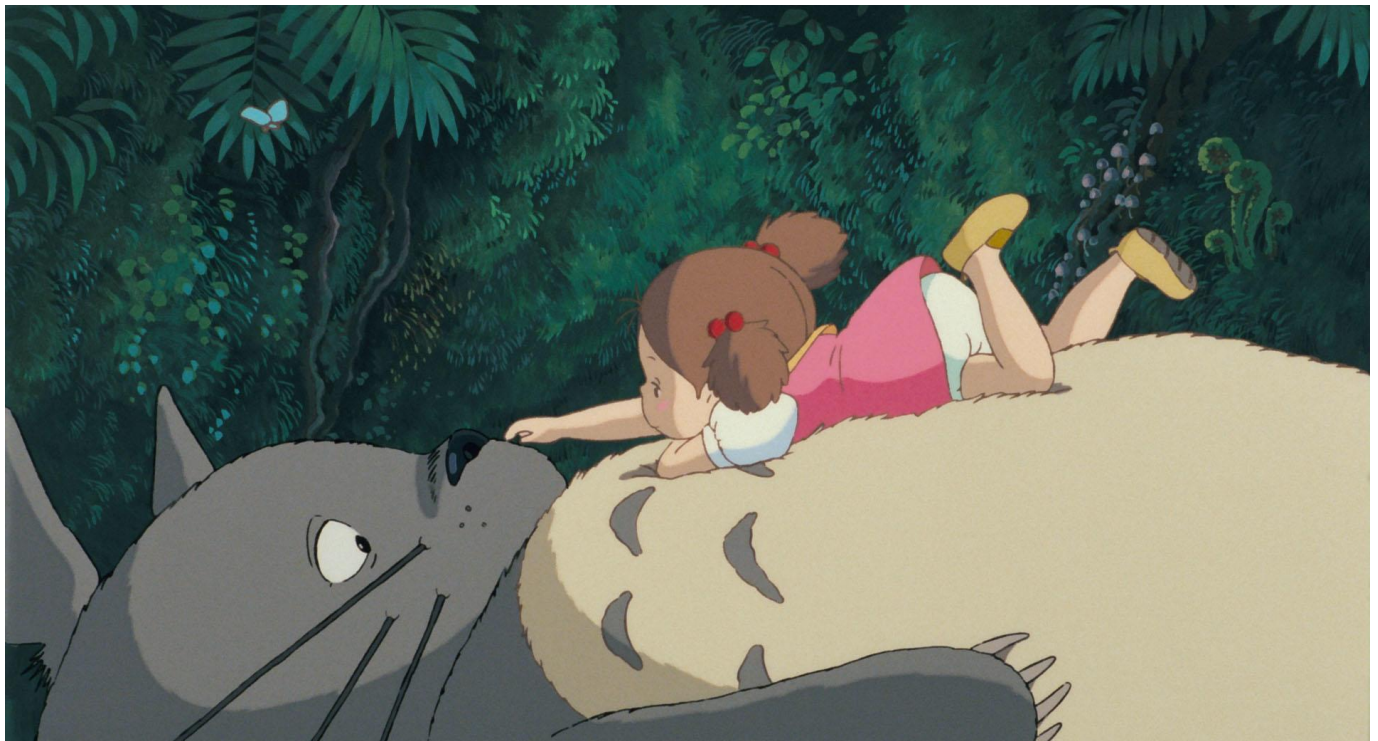
そうだとすると、実はこのお見舞いの帰り道、メイはお母さんに早く帰ってきてほしい、そして一緒に寝たいという気持ちが浮かび上がってきているのです。これはもちろん、4歳のメイとしては当然の気持ちと言えるでしょう。



さて、お見舞いの翌日です。慌ただしい朝の風景、姉のサツキはまるでお母さんが乗り移ったかのように、朝食とお弁当の準備に余念がなく、友達が迎えにきて学校に早々と登校してしまいます。お父さんはいるのですが、徐々に

自分の研究にのめりこんでいきます。

そうして、一人取り残されたメイの前に、ついにちびトトロが現れるのです。ちびトトロを追いかけていくと、メイは木のうろの中にある大きいトトロと出会います。そしてメイは、トトロのホワホワの柔らかいお腹の上で気持ちよさそうに眠りにつくのです（ちなみにこのシーンを見ている子どもの顔がじわじわ緩んでいくのを見るのは観察する価値あり、です。）



まさに、メイが前日に感じた「お母さんと一緒に寝たい」という願望が叶った瞬間でした。お姉ちゃんは学校、お父さんは研究、そこで1人取り残されたメイの「お母さんと一緒に寝たい」という切実な願いがトトロによって叶えられたのです。実は、サツキもメイもお母さんの不在と「いなくなってしまうかもしれない」という喪失の恐怖にさらされていたのです。よく考えれば当たり前なのですが、4歳と小学生の姉妹にとって、母の入院は心理的な危機状態をもたらしていました。その中で2人は、強がったり、不安になったりしながら頑張っていたのです。そしてそんな2人を育てる不在のお母さんの代わりがトトロだったというわけです。



しかし現実の不安と心配に圧倒され、今まで仲の良かった2人もついに大ゲンカをしてしまいます。頼もしいお姉ちゃんから、すっかり子どもになって泣きじゃくるサツキをみて、メイは母を助けるために「とうもころし」を病院に持って行こうとして道に迷ってしまいます。



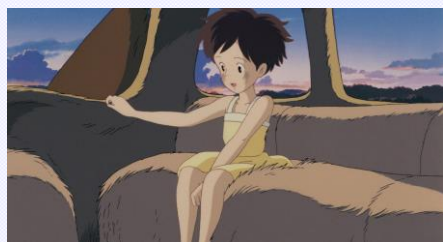
そのメイを助けるため、サツキはトトロへの道を開きます。この時の不安や心細さ、そして、妹を探すサツキの焦りや罪悪感は見ているもののこころを打ちます。それは私たち皆に覚えがあるものです。家で1人でお留守番していた時「もしかしたらみんなもう帰ってこないのかも」と不安になったり、夜道を1人で帰る時に感じる心細さや怖さ。それは保護者がいなくなり、ひとりぼっちになるかもしれない、という皆が体験したことのある恐怖と言えるでしょう。私たち皆のこころのどこかにあるこの原点的な不安と重なって、ハラハラドキドキ、映画にひきこまれていきます。



夏の武蔵野の夕暮れの風景が美しく描かれています。そんな中、メイまで事故にあったら?! 私のせいだ! と必死に走るサツキの姿は、まさにわたしたちの子ども時代です。頬を伝う汗と涙、足の裏の痛み、走り続けた時につまる喉の感覚・・・このシーンは五感と記憶を動員させれば、私たちの心の中の郷愁や追憶に辿り着く名シーンだと思います。こんなこと私もあった、という感覚を探してみてください。

トトロや猫バスの力を借りて、この危機は乗り越えられます。裸足で走ったサツキの傷ついた足を猫バスの床がほっくりと包む時、私も見ている子どもたちも思わずホッとします。

そうして母の無事を見届けた2人はどこか成長した面持ちで木の上に座っていて映画はクライマックスを迎えます。



もう忘れてしまっているかもしれませんが、子どもの頃、このような不在や分離などのこころの危機を体験しながら、わたしたちも一歩ずつ大人になってきたのです。その時、心細さを乗り越えるため、ぬいぐるみを抱っこしたり、空想に耽ったりもしてきました。本を読んだり、アニメや映画を見ること、戦隊もののヒーローやプリキュアに救世主を見るのもそんな心の動きの一端と言えましょう。しかし、そんな時にこころの守りが十分でない時は、空想は怖いものや不安に圧倒されてしまうこともあります。そんな時、子どもたちは「3びきのやぎのがらがらどん」のトロルのような怖いおばけに会ってしまって、パニックになってしまうこともあるのです。

エンドロールを見ると、母親が帰宅し、弟も生まれたようで、サツキとメイが幸せに過ごしていることが伝わってきます。



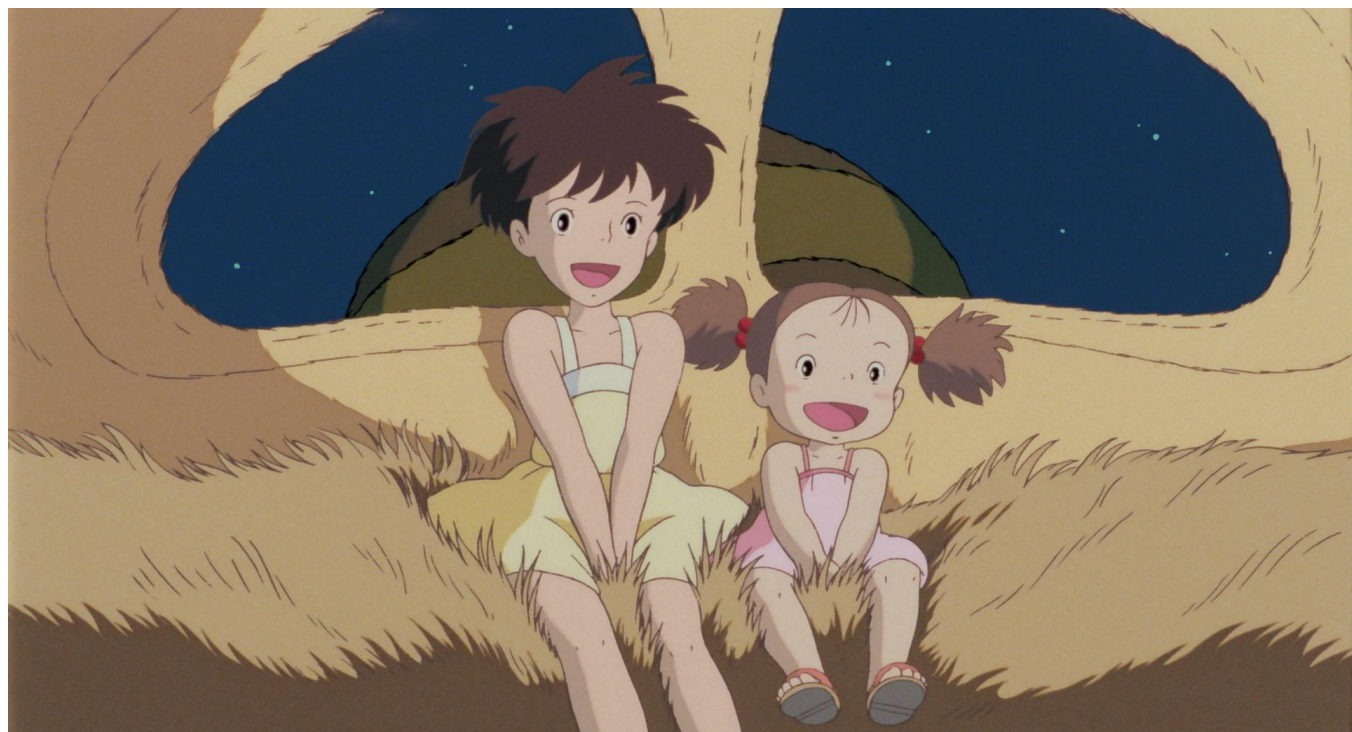
「子どもは、様々なこころの危機を、空想や夢の世界を駆使してたくましく乗り越えていく」となりのトトロを通して伝えたかったことはそんなメッセージのように私には思われます。

だがしかし、です。「となりのトトロ」はあまりにいい話過ぎると思いませんか？ おそらく、きっと宮崎監督もそう思ったのでしょう。現実はずっと困難で複雑なものですし、その中で成長していくのも簡単なことではないのです。トラウマや矛盾、あるいは喪失体験などの困難も人生では避けて通れないものです。

そして、少し触れましたが（これを書いている私も読んでいる皆さんも含めて）リアルな親はトトロの両親ほどゆとりはなく、あんなにも肯定的にはなれないはずです。

「となりのトトロ」をまずは世に送り出したことで、子どもの基本的な力について描くことはできました。しかし、宮崎監督の次のテーマはもっと困難な状況で子どもたちはどう生き延びていくのか、ということにテーマが進展していきます。それが「もののけ姫」であり、「千と千尋の神隠し」につながっていくのです。

今回はここまでといたしましょう。次回もどうぞよろしくお願いいたします。



岩倉 拓(いわくら たく)

臨床心理士、日本精神分析学会認定心理療法士

現 聖マリアンナ医科大学非常勤講師 精神分析的な心理臨床セミナー講師

経歴

1997年 横浜国立大大学院教育学研究科修士課程修了

電話相談員、精神神経科クリニック、スクールカウンセラー、大学病院心理士、保健所・乳児院コンサルタント 等を経て、2007年あざみ野心理オフィス開設

専門

精神分析的な心理療法、分析的理解に基づくアセスメント・マネジメント ひきこもり支援
トラウマとPTSD、災害支援

執筆

スタートライン臨床心理学 弘文堂 子どもの心理臨床 関係性を育む 建帛社

パーソナリティ障害の精神分析的アプローチ 金剛出版

治療0期の耕しと治水 一乾吉佑編 心理臨床家の成長 金剛出版

事例で学ぶアセスメントとマネジメント—こころを考える臨床実践— 岩崎学術出版

その心理臨床、大丈夫？ 心理臨床実践のポイント 日本評論社 (いずれも分担執筆)、他

編集後記

いかがでしたか？

こうして見てみると、サツキやメイがひと夏の間に経験したことの意味や、その過程でどんな心の成長を遂げていったのか、トトロは子どもたちにとってどんな存在だったのかについて、新たな理解が得られたように思います。

世の中もちょうど夏真っ盛り。子どもたちにとっては昨年につき、コロナ禍での2度目の夏休みですね。オリンピックで盛り上がる一方、感染者数はこれまで以上に増大し、何度目かの緊急事態宣言も発出されました。先の見えない不安や、制限の多い不自由さに、大人ですら「もう限界」という気持ちが高まりますが、こうした状況を子どもたちはどんな風に体験しているのでしょうか。

サツキやメイの心を追うように、じっくりと観察してみると、子どもたちなりに“防衛機制”を働かせて対処しようとしているかもしれませんし、トトロのような癒しを必要としているかもしれません。トトロがトロールになってしまっていたら要注意。そこを見逃さずにしっかり見守りながら、少しでも子どもたちの成長につながるような夏休みになればと願っています。

次号もまた楽しみにお待ちしております。



イラスト出典：スタジオジブリ 画像提供

編集：児童思春期専門外来

臨床心理士/公認心理師：塚原・中村・尾上